妻に叱られて㉔

「お遍路」で妻に叱られて

土居　修

「自分探しの遍路旅など今さらできるかよ」

「そうよね。探したって、見つかるわけないもんね」

私の返答を想定して準備していたにちがいない。恐るべき熟女、である。一呼吸おいて、お遍路には、と小賢しくのたまった。

「あらかじめ死後の冥福を祈る予修供養の意味合いもあるのよ」

忌々しい熟女、でもあった。

「そうらしいね」

仏頂面をして答えた次の瞬間、だったらと、熟女はいった。

「自分の冥福を祈ればいいじゃん」

「えっ、祈ってくれんが」

「祈ってほしいの」

敵意のこもった妻のことばを慄然として聴いた、2019年師走の夕刻。焼酎を呷って嘆息するしかなかった。妻が私の菩提を弔うことを躊躇しているのである。おのれの運命を呪うしかなかった。

やるせない思いを五臓六腑に送り込みながら、空海の作詩した漢詩『遊山慕仙詩(ゆうざんぼせんし)』の一節、「一身独り生歿す。電影是れ無常なり」と口ずさんでいた。「人間生まれるときもひとり、死ぬときもひとり。稲妻の一瞬の光のように」

私にはこうした覚悟あるいは諦念がないこともない。男の美学に無常観は必須である。

「じゃあ自分で祈るよ」

「素晴らしい心がけだわ」

ほくそ笑む熟女を横目で睨んでいたら、ひとすじの涙が頬を伝って落ちていった。熟女の策略にまたしてもはまってしまったのである。みじめであった。

侮りがたい熟女が食卓に並べているチキン南蛮。鳥肌が立ってきた。ふたたび、おのれの運命を呪いながらも、それが妻の本心ではないはずだと願わずにはいられなかった。

翌年、逆打ちをして結願。おのれの冥福を祈ることができたと確信した。

「まだまだね」と冷ややかな熟女。

「もう、菩薩の域に達しているよ」

「ばかじゃないの、この男は」と叱られた。

コロナ感染の危険度も小さくなったわということばに抗し続けることができないままに、今年ふたたび金剛杖を手に取らされた。熟女の軍門に降ることが習慣性を帯びてきている、それがせつない。

睦月下旬。早朝4時に出発し、徳島ICを抜けて県道28号線に入り、「民宿坂口屋」の交差点を左折。極端に細い九十九折の道を約2km走り、黒河駐車場に着いた。そこから30分かけて歩く。ロープウェイには乗らなかった。480円を惜しんだのではない。予修供養のために歩けるところは歩くと決めた男の、意地の遍路旅である。

四国八十八か所霊場第二十一番札所、太龍寺。四国山地の東南端、太龍寺山弥山の山頂近くに建つ。七九三年(延暦一二年)、桓武天皇の勅命により弘法大師によって開創。樹齢数百年余の林立する老杉が天空にそびえ、古刹の霊気が漂う。太師堂の「御廟の橋」「拝殿」「御廟」と並ぶ配列は和歌山県高野山の奥の院と同じであり、「西の高野」とも呼ばれている。

息を整え、山門に一礼して本堂に向かう。早朝の境内に人影は疎ら。七十歳代と思われる老夫婦と六十歳代の男性。ほかには落ち葉拾いをしている高齢の女性がひとり。

最初に本堂で読経し、太師堂へ。般若心経を唱えているときであった。朽葉色のハーフコートを着た女性が私たちの背後を通り過ぎていった。爽やかで優しい香りが私の鼻孔をくすぐった。

「さっきの女の人、御廟にそのまま行ったよ」経本をしまいながら、私はいった。

「本堂にもいなかったよね」と妻。

拝殿回廊を回り込んで御廟に向かう。八十八か所で、三度の読経しなければならない唯一の札所である。果たして、先ほどの女性が合掌、瞑目していた。専心一意になにかを唱えている。聞き耳を立てたが、聴き取ることはできなかった。通常の読経でないことだけは察知できた。

セミロングの髪。鼻梁がスッと反って清楚な感じのする細面が、冬の朝の淡い光を受けてシルエットになっていた。30歳を少し超えているかなと無遠慮に値踏。だが、左肩にかけているやや大きめの白色のトートバッグは明らかに不釣合いであった。それには、黒色で「天下無敵」の隷書体が施されていた。

私たちが読経を終えても、その女性は動こうともしなかった。拝殿を下り、山門に向かいながら幾度となく振り返っても、彼女の姿を捉えることはなかった。

坂道を下りながら、あの女性はと、私はいった。

「亡くなった子どもさんの菩提を弔っていたんじゃないの」

「そうかもね」

「あのバッグはきっと、子どもさんのものだよ」

「彼女の幸せを祈らずにはいられないね」

だけどと、妻がいった。

「人様のことはいいから、予修供養だけはちゃんとしてね」

冬枯れの景色が胸に刺さってきた。思わず「色即是空　空即是色」と呟いていた。